歌劇【蝶々夫人】

初演以来世界中で扱われてきた間違いだらけの日本に気付こう! 直そう! 真の日本を世界に発信しよう!!

プッチーニ指定の 日本の鐘の音世界初録音 試聴可(連絡乞う)

公演DVDあり(下段参照)

プッチーニが熱望した"本当の日本の鐘の音"は、初演以来今まで一度も

鳴らされたことがなく、世界中から奇妙な日本が聞こえてくる

●お寺の**釣鐘はゴ〜ン**と鳴らず、中国の**銅鑼がジャ〜ン**!

- ●家庭の仏壇の中の小さな鐘(おリン)はチ~ンと鳴らず、替わりに教会の鐘他が(泣)···
- ●伴奏も含め、すべてがppで歌われる愛の2重唱。その中でロマンチックな合いの手を唯一 f で鳴らす僧侶の叩く " $\mathbf{\mathfrak{u}}$ (キン)" のコ~ンは、世界中どの劇場でも一度も正しく鳴らされたことなく、

歯抜けのまま演奏され・・・

●蝶々さんの家の風鈴はチリチリンとは鳴らず、奇妙なことに**ヴィブラフォン**他の音が慣習となり・・・

等々、我らが日本の"新国立劇場"ですら、今も尚お寺の釣鐘から中国の銅鑼の音が鳴っている惨状を、 あなたは良識ある日本人として、放っておけますか!?

- ●お寺の釣鐘の音に似せて作られた擬音用の鐘は、歌舞伎等で使うため、古くから日本に存在している
- ●仏壇のおリンは最近、富山県の【山口久乗商店】が楽器として使えるよう、12音の音階を持ったものを制作し、すでに広く販売している
- ●風鈴の音はミとドの組み合わせがオクターヴ違いで計**4音**要求されているが、これらは南部鉄の産地岩手県の水沢で調達し、音程を微調整することで願いは成就
- ●僧侶が寺で経を読みながら叩く大きな鍋型のかね**鉦(キン)**には、プッチーニが12音の音程を付けているが、最近では楽器として12音に調 律されたものも市販されている。等々近年、**物理的には**完備できるようになった。

問題点; しかし、残念ながら金属でできた仏具や楽器は、邪魔な**倍音が、期待する音程より大きな音で生じる場合が多い**。そのためバランスよく客席まで鳴り響かそうと強く打音すればするほど、生じた倍音によって必要な音程が消され、オペラ中では有効な効果音となり辛い場合が多い。

拙著

「クラシック音楽・

未来のための演奏

論」(毎日新聞社版)

に*詳細掲載*

【蝶々夫人】の演奏に革命が!

近年他の演目で、西洋の主要歌劇場を席巻しつつある最新IT機器により、

総譜に書かれた本物の鐘をもってしても、倍音等により今まで効果的に鳴ったことのなかった

プッチーニ念願の*日本伝統の鐘の音*等が、**世界で初めて**演奏可能に‼

上記金属楽器等の共通の弱点をカバーする最良の機器が、コンピューターである。近年のIT技術の目覚ましい発達により、<u>すべての音がその本当の音色と音程で発音できるようになった</u>。映画の分野で世界を席巻し始めた C.G.システムのように、<u>音量、音色、遠近、音源の位置等々、実物が鳴るより遥かに良い状態で、臨場感いっぱい客席に伝えることが可能となった</u>のである。この技術を生かし、【蝶々夫人】に必要な日本の種々の鐘の音等、すべての擬音をコンピューターに取り込んで、必要な舞台上、あるいは舞台奥等最適な位置に隠しスピーカーを設置し、音量調整、場面に応じた(舞台上か舞台裏か遠方からか、あるいは上手か下手か等)音色調整をすることにより、プッチーニが意図したにも拘らず、今まで誰も聞くことのできなかった、様々な日本の重要な伝統の鐘の音等を、臨場感溢れる理想的な条件で客席まで届けることが可能となったのである。

初演以来百十余年、世界中どの劇場からも、プッチーニの意図した楽譜通りの鐘の音は鳴ったことがなかったため、評論家や指揮者等誰も が気付いていなかった、このオペラの本質ともいうべき**隠された重要な伏線**の存在も、このITシステム導入による本当の鐘の音の実現に より初めて明らかになった。以下に順次説明していこう。

ィブDVD試聴可!

(内藤彰のホームページ

https://naito-conductor.com

の、"超名曲の常識を斬る"から入る)

歌劇【蝶々夫人】演奏会形式ハイライト

2016年9月;東京芸術劇場;東京ニューシ

ティ管弦楽団第101回定期演奏会

指揮; 内藤彰

プッチーニの切望する日本の鐘の音によるラ╏正味2時間半近くかかる【蝶々夫人】だが、上記種々の日本の伝統の鐘が使用されている場面を中心 に、カット部分すら判明つかないよう、1時間6分に上手く纏めてある。通常の銅鑼に代わり梵鐘(釣 **鐘)**の音は各所でしっかり聞こえ(大きすぎ?)、愛の2重唱の合いの手の**鉦**(キン)も良好。今迄世界中で、 技術的に不可能であったがため鳴らされたことがなく、その重要な意味合い(伏線)が表に出されるこ となく終わっていた、3幕冒頭のキリスト教の鐘と仏教の鉦が同じメロディを仲良く奏でる仲直りの2 **重奏**も、世界で初めて上手く鳴らされている(後述)。ただ結婚式中の風鈴の2重唱は、風鈴を撥で叩い たがため、響きが抑えられ、本来の風鈴の持つ余韻が響かなかったことと、3幕冒頭のスズキのお祈 り中に叩く鈴(おリン)を、スズキが舞台上で叩く際、撥で響きを止めてしまったため、本来の良い音 色にならなかったことが惜しまれるが、それでも他のどの歌劇場でも聴けない本当の響きが聞ける 故、 **乞う御試聴!**(但し、一定以上の大きさのスピーカーによる再生が必須条件である)。

①曲中使用される各種の鐘の**日本名** ②プッチーニは、その音をパリの万国博(1900年)で聞いたり、レコードを通して知っていたが、日本名 を知らなかったため、苦し紛れに**イタリア語で創作した名前 ③イタリア語による"かね"の舞台上(裏)の設置条件と**その**日本語訳 ④楽譜上で の登場箇所;楽譜の練習番号を基準とした小節数⑤その意義と成果。使い方等の説明** を一覧表とし載せた。

①風鈴 ②campanelli giapponesi ③sulla scena(舞台上)lasciar vibrare(長<響かせたまま) ④1幕練習番号82の後4小節~

小高い山の中腹に一軒建っている蝶々さんの家で結婚式が行われている時、「舞台上から日本の小さな鐘が鳴る」と総譜に書かれ、高い音程で可愛くチ リンチリンと響く音符が書かれている「「余韻を残して」との注意書きあり)。

この場面で舞台上から誰かがそのような音を鳴らす設定はなく、小さな鐘が空中で飛び廻っているはずもなく、そのような種類の音が夏のように暑い日に、 舞台上から鳴って来るという条件を満たす **"日本の小さな鐘"**は、舞台上に唯一存在する彼女の家の軒先に吊るされている"風鈴"以外あり得ない。季節 はおそらく初夏であろう(総譜上に書かれてある桜は、彼の中では夏に咲く花なのだろう。富士山が長崎の背景に描かれているような外人ならではのご愛敬 と解釈しよう!)。ヨーロッパではその楽器が何であるか判らないまま、巨匠指揮者が苦し紛れに全く場違いなヴィブラフォンを風鈴の替わりに鳴らしたことか ら、他の指揮者もその多くが、訳の分からないままそれを模倣してきた。日本国内でも、長くその物真似をしてきたが、日本人からすると極めて滑稽な過ちで ある。風鈴の内側には、風を受けて揺れる長さ十数cmの長細い紙がぶら下がっており、その紙と風鈴を結んでいる糸に付けられている小さく極めて軽い金 属片が風鈴の内側に軽く触れ、綺麗な可愛い音を発する。ここでは総譜に書かれているようにその響きは、自然に消えるまで鳴らしたままで・・・・。

①**梵鐘(釣鐘) ②Tam Tam grave ③interno**(舞台の奥・背後から) ④1幕練習番号**100**の後4小節~

"Tam Tam Grave"という楽器名は、プッチーニが以下の状況下で、名前の分からない日本の寺の釣鐘(梵鐘)に対し苦し紛れに付けた彼オリジナルの名 称である。すなわち、当時発明されたばかりのレコードに収録された日本の数々の音楽や世俗音を聞く中でその音を知り、またいくつかの資料や在イタリア の日本人公使夫人からも知識を得た結果、音やその形状は知っているものの名前が判らない、日本の寺の庭に吊るされている直径1~2m、高さ2~3mの 大きな**釣鐘**、すなわち日本人にもあまりその正式名称を知られていない**"梵鐘"**に対して名付けられた仮名である。

今まで西洋の劇場では、この楽器(釣鐘)が何なのか理解できないまま、東洋の楽器だからとして、普通のTam Tam(中国の銅鑼) を単なる効果音として、 派手にジャ~ンと鳴らしていたが、総譜、パート譜共、普通のTam Tam とは別の楽器として、5線譜では別の行に区別して書いてあり、通常のTam Tam の ことではない。すなわち初演以来ずっと誤った音が鳴らされてきたことは明らかである。

この釣鐘には、蝶々さんが結婚式前夜キリスト教に改宗したことに激怒した、叔父である僧侶が仏教の代表として発する怒りの叫びに呼応し、プッチーニ は"<mark>低音で荘厳な、そして重々しい東洋風な鐘の音"</mark>が鳴るという意味で、"Tam Tam grave" という奇妙な名前を与えた。 そしてそれがオーケストラピット の中からではなく、舞台の奥(内側)から鳴る、という意味で interno という条件を総譜に指定した。まさに舞台の奥(現実には家の外)、 すなわち近所の寺か ら僧侶の怒鳴り声に加勢して(仏教を代表して)、ゴ~ンと怒りの響きを発っしたのである。

プッチーニが、この仏教を象徴する釣鐘を"叔父の怒り声に呼応して"登場させた背景には、単にその怒鳴り声に呼応する効果音としての目的のみなら ず、その時点から始まり、終幕の蝶々さんの自殺の場面まで、彼女の心の中に根強く残っていた"彼女自身のキリスト教信仰と仏教信仰、そしてそれに拘る すべての人々や、神道を含む仏教とキリスト教の3つの宗教が複雑に絡み合う様々なわだかまり"が、物語の展開に応じて徐々に変化していく様を、物語進 行上の**重要な伏線**として描いていくという、今まで誰も気が付かなかった崇高かつ重要なる意図があった(後述)。

しかし初演以来百有余年、西洋の歌劇場ではこの楽器が何であるかも、それに纏わる**重要な伏線が敷かれている**ことも誰もが全く気付かないまま、プッ チーニの指定とは異なり、誤った単なる中国の世俗音であるTam Tamを、僧侶の怒りに呼応する単なる効果音としてのみとらえ、 派手に鳴らしてきた。

日本国内ですら、西洋の劇場を信ずるがあまり、日本人なら総譜さえ吟味すれば誰にでもわかるはずの同じ過ちを、現在まですべての公演でそのまま受 け継いできている。オペラの世界でいつまでも続く、西洋に対する日本人の劣等感が故の、実に嘆かわしい現象と言わざるを得ない!

①鉦(キン); 寺で僧侶が経を読みながら大きな特製の撥で叩く大きな椀型の鐘 ②Tam Tam giapponesi

4)1幕番号134の後2小節目~8小節目

1幕最後の《愛の2重唱》の場面; 星空の下、歌も伴奏もすべて p 又は pp で静かにロマンチックに歌われる結婚初夜の愛の2重唱の場面 で、唯一 "鉦" のみが、大きな音 f で、2小節ごとに計4回合いの手として、ムードを高めるために鳴らされる、大変重要かつ極めて目立つ 効果音である。

ところが今までこの楽器が何なのか判らなかったため、世界中ほとんどの劇場で、この一番大切な効果音は鳴らされないまま、歯抜けで 演奏されてきた。日本では苦し紛れにタイのおもちゃであるタイゴングを鳴らすこともあったが、それらはちゃちなおもちゃであり、音程 や音色等に難がある故、効果音としてはお粗末な代物であった。

①**鉦(キン)** ②Tam Tam giapponesi ④1幕練習番号136の後2小節目~1幕終わりまで

上記と同じ理由で、今まで歯抜けのまま、正しく演奏されたことのなかった《愛の2重唱》の後奏で使われる鉦も、ムード作りに抜群の効果を醸し出す。しかし、初演以来一度として正しく鳴らされたことは無かった。

①鈴(リン); 仏壇の中にある小さな椀型の鐘 ②campanella ④2幕練習番号2の後8小節~番号3の後11小節目まで

お祈りの前に小さな専用の撥で軽く叩く、日本人にはお馴染みの直径数cmの小さな鐘である。通常この<u>おリン</u>には音程の概念はなく、誰にも気にされることのないまま様々な音程で作製され鳴らされていたが、この場面では A dur の曲中で使われるため、A(ラ)が要求されている。ある巨匠指揮者は、訳も分からないまま、お祈りの際に鳴らす鐘だからとして、教会の鐘(chime)のAを鳴らせていた。仏壇の中から!!

①鉦(キン)+教会の鐘(chime) ② Tam Tam giapponesi + campanella tub. ④3幕練習番号7の2小節目~

蝶々さんの、キリスト教へのにわか改宗を、神道や仏教徒である友人や親類からとがめられ見放されたことにより、当初精神的に暗い生活を送っていた蝶々さん。しかし時の経過とともに、ピンカートンの帰りを信じ、生まれた子供との幸せな生活を送る中で、徐々に彼女の心の中から2つの宗教間のせめぎ合いが解消され、幸せに暮らせるようになっていった。

その事実を暗示するためプッチーニは、3幕冒頭部で他のすべての楽器を**p**で演奏させる中、小鳥のさえずりと共に、キリスト教の鐘 (chime) と仏教の鐘(鉦) だけに f を与え、その2つの楽器を他より突出させた状態で、全く同じ旋律を 仲良くデュエットさせることにより、彼女の心の中で<u>わだかまりが解けたことを示そうとした</u>。

今までこの**デュエット**のために使われているTam Tam giapponesi が何の楽器であるか不明であったことと、プッチーニが、チャイムの音程の指定に低音H(シ)とA(ラ)という、チャイムの音域外の音程を書いたため、その音程を出すことが出来ず、したがって世界中すべての劇場で、今まで<u>どちらの楽器からも</u>楽譜に指定された音程で、正しく仲直りのデュエットを演奏することは不可能であった。

すなわち、本来一番大きな音で浮かび上がってくるべき2重奏の旋律が、実際には演奏されないままであったため、そもそも劇の進行上極めて重要な意味を持つ、この2つの宗教間のわだかまりが解けたことを示す<u>"仲直りのデュエット"そのものが(このオペラ全曲に亘る伏線として)設定され、重要な意味を持たされていること自体、世界中誰も気付くことが出来なかったのだろう</u>。

①梵鐘(釣鐘)②Tam Tam (grave)③設置条件; sulla scena(舞台上から)④3幕練習番号56の4小節目

蝶々さんの自殺の瞬間に鳴らされる寺の釣鐘;この歌劇の根幹をなす宗教上の極めて重要な、**釣鐘だけによる一打**である。夫ピンカートンに裏切られ、仏教信者に戻った蝶々さんは、仏壇の前で仏教徒としての振る舞い(当時残っていた神仏混淆の慣習により、決意の文書を仏壇の前で"祝詞"のように読み上げること)をこなした後自死するが、キリスト教徒の夫に裏切られ、最後に仏教に戻ってきた蝶々さんの可哀そうな死に対し、その自殺の瞬間、大半の楽器を急激に沈黙(dim.)させ、**仏教を代表する寺の釣鐘のみ**が、仏教の憐みと慈しみの象徴として、**ffで心に染み入るように彼女の躯の上にゴ〜ンと響き渡る**。

今までは、その重要な意味合いに日本人すら誰も気付くことがなく、単純にドラマの盛り上がりの頂点(自死)に対する効果音として、世界中で<u>誤ったTam Tam が派手に鳴らされ</u>場を盛り上げていた。プッチーニの意図を全く知らなかった歴代の指揮者や評論家、聴衆にとって、それはそれで心に響く名場面に映ったに違いない。しかし、総譜にはこの一打だけはsulla scena、直訳すれば "舞台上(舞台背後)から鳴る"と敢えて指定され、通常のTam Tamではなく、梵鐘であることを暗示している。一幕に初めて出てきた梵鐘の一打は、前述したように総譜ではTamTamとは別の行に書かれていたが、ここでは同じ欄に書かれている。おそらくプッチーニ自身その使い分けを失念していたのだろう。その代わりに、楽器の違いをsulla scenaと書くことにより、区別した。そしてこの一打が終わると、Tam Tamはまたin orchestra すなわち "オーケストラピットから通常通りのTam Tamとして鳴らされる"と<u>わざわざ指定し直されている</u>。

すなわちプッチーニは鳴らされる位置を指定(sulla scena)することにより、この一音だけは一幕で鳴らされた釣鐘の場合と同じ東洋の鐘、すなわち釣鐘の意味であることを示そうとしたのである。もし、今までの誤った演奏のように、普通のTam Tam が自殺場面の盛り上げの効果音として使われたとしたならば、その一音だけの世俗音がなぜ特別に舞台の上又は背後から、何の意味を持たされ、誰によって(舞台上に打楽器奏者が移動して?)鳴らされようとしたのだろう。普通にオーケストラピットの中で派手に鳴らされればそれで十分であり、かつそれがベストのはずである。しかもなぜ多くの楽器が急激にdim.し、静かになってからその一打だけが効果音として鳴らされなければならないのだろう。

もし盛り上がりの効果音としてTam Tam を使うなら、他の楽器をわざわざdim. させず、逆にffの中で派手に鳴らした方がずっとドラマチックな効果が出たはずである。これらすべての事実からこの鐘の音は、上記のように<u>仏教の(お釈迦様の?) 憐みの一打</u>である、以外考えられないことがわかる。世界で唯一日本人だからこそ理解できる、いえ唯一理解できる日本人がだからこそ、これだけ詳細に調べて劇をドラマチックに構成し、日本独特の鐘の音を使い分け、日本人以上に日本の心根を持ったプッチーニのためにも、今後は正しい釣鐘の音をプッチーニの思いに寄り添って鳴らしていき、かつそれを世界中に広めていこうではないか。

注1) 本当は一幕で僧侶の怒声に応じて釣鐘が鳴った時のように、Tam Tam graveがinterno から鳴って来ると書くべきだったのかもしれない。しかし、プッチーニ自身名前も知らない釣鐘のことを、総譜に如何なる名前を付け、どのように総譜上でその鐘のことを説明すればよいか彼は大いに迷ったまま、結果として一幕の場面と、この最後の場面とで表記の仕方がたまたま違ってしまったのだろう。

注2) 一幕のinternoも三幕のsulla scenaも、皆同じ意味で使ったものと考えられるが、ひょっとして、一幕のように具体的に背後の寺から鳴ったとするよりは、文字通り自殺した蝶々さんの真上(sulla scena)(極楽?)から、優しく彼女を包み込むように鳴ってくるように、 と敢えてこだわったと解釈することもできる。いずれにしても通常のTam Tam のジャーンでは有り得なく、上記条件にすべて合致する鐘の音は釣鐘以外に存在し得ないのである。

★プッチーニが望んだ日本の神仏の名前等には、日本公使夫人から名前を教えてもらった際、彼の不注意のための聞き間違いが多く存在す る。

★日本人でしかプッチーニの願いを聞いてあげられない故、彼のたっての願い"日本を正しく表現する"に従い、奇妙な日本語を自然で正 しい日本語に直してあげよう。

(注1)廃仏毀釈;

「仏教を廃し、釈迦の教えを棄却する」明治政府が天皇中心の 政治体制にするため、神道国教 化政策に基づいて起こった仏教 の排斥運動。

神仏分離令発布と共に、仏堂・ 仏像・仏具・経巻等に対する破

壊が各地で行われた。

江戸時代までは、神道と仏教の 対立を防ぐため、神仏混淆政策 が長く採られ、両宗教が混ざり

合い、神主と住職を兼ねること も珍しくなかった。

プッチーニは劇中、日本語の神仏等の名前を、そのまま正しく日本語で歌わせようとした。しかし、主に当時の日本公使夫人から聞いた名前を、日本語のまま歌の中で使おうとした彼は、結果として残念ながらいたるところで不注意な間違いを起こしていた。

それらは、我々日本人からすると絶対に修正してもらいたい、大きな間違いであるが、それよりも、間違いを多く犯したとはいえ、彼が一生懸命正しく日本語そのものを劇中に用いようとした気持ちは、日本人として大変嬉しく、光栄ともいうべきことであると言える。故にプッチーニの思いを遂げてあげるためには、日本人にしかできない日本語の修正を、我々日本人がやって差し上げることが当然の責務ではなかろうか。私はその思いで、多くの修正をしながらこのオペラに接してきた。そして外国の劇場でも広く啓蒙してきたつもりである。その一部を以下にご披露する

●まずは当時の日本の宗教等の背景を知っておく必要がある。明治初期には、明治政府による<u>廃仏毀釈</u>政策 (注1)により現在よりずっと神道が重んじられ、それにつれて当時の一般人の中では、現在では考えられない 神道の神の名前が仏教の祈りの言葉にまで用いられることすら有り得た時代であった。

さらにその背景には、古くから時の政権により敷かれてきた神仏混淆政策により、僧侶が神道の祝詞を上げたり、その逆も行われていた事実を忘れてはいけない。その事実を踏まえなければ、1幕の結婚式後に、参加した芸者衆や僧侶が共に神道の神の名を呼んだり、2幕冒頭で、女中のスズキが仏壇に向かって神道の神の名前を呼ぶ、という現在では考えも及ばない不可思議な現象は理解できないからである。

<mark>(注)★2幕冒頭のスズキの祈りの</mark> 現在の日本人からすると理解し難いこれらの現象を、プッチーニの不注意なミスと採るか、世界宗教史上極 めて稀な、何百年にも百ろ日本の神仏混淆政策がもたらした、明治初期の日本だからの現象として、今なら 場面で、有名な日本語による神 ありえない奇妙なやり取りを真摯に受け止めるかどうかは、日本人指揮者としてそれぞれの個人に任せるこ とにする。それとは別に、劇中感んに用いられた神道の神の名前の不注意な間違いは直して差し上げようと 道の神の名前アマテラスオオミ 思う。 カミが出てくる。 ★一幕で蝶々さんの叔父である僧侶が叫ぶ"神猿田彦(さるんだしこ)"に関してだが、当時の東京では"<mark>ひ</mark>"が 江戸弁で"し"と訛っており、プッチーニは生粋の東京人である公使夫人からその名を"Kami di この名前を劇中では「テンショ Sarunda<mark>hi</mark>ko"ではなく、"Sarunda<mark>shi</mark>ko"と聞いたため、忠実に'しこ'と書いたのだろう。しかしこれは長 ウダイ」と発音させている。こ |崎にはない訛故、'彦'の発音は"ひこ"に直し、ついついイタリア語の文法に従って、猿田彦の前に来てし まっていた'神'の位置も、後ろに回し、日本の慣習どおり"猿田彦神"と直し、さらに"の"を加えて"猿 れは、公使夫人から聞いたその 田彦の神"と、通常の日本における慣習的言い回しどおりに修正する。 ★"いざなぎいざなみ"という日本では大変有名な神の名前が、間違って"いざぎいざなみ"になっている ままなのだろう。 故、'な'を加える。又、"猿田彦の神"が"Sarundasiko e Kami"となっているが、eは英語で言うandである 漢字は【天服大御神】である 故、"猿田彦と神"のように、それぞれが別の人格になってしまう。これは明らかにプッチ―ニの勘違い故、 が、神道では音読みするそうで 「猿田彦<mark>の</mark>神"にすべきであろう、彼は正しい日本語で歌われることを切望していたのだから。 ★蝶々さんの荷物にあった位牌に対し、'これは何か'とピンカートンに聞かれ、彼女は"**日本語"**で ある。 "リョットケ"と答えている。プッチーニは彼女に"仏様(ほとけさま)"と日本語で言わせたつもりだったの そうなると「テンショウダイ<u>ゴ</u> である。しかし"<mark>H</mark>otoke"の<mark>H</mark>はイタリア語にはなく、しかも"仏" は名詞なので、イタリア語では必ず冠詞(英 <mark>ジン</mark>」<mark>のはずだが、南無阿弥陀</mark>語で言うthe)が付く。その癖によりついついイタリア語の冠詞の一つである"gli"を付けてしまい、"**Gli O**toke" としたのだが、そこに何かの間違いでtが余分にもう一つ付いてしまったため、結果として "Gli Ottoke"⇒ 仏の代わりにナンマイダーと最 "リオットケ"⇒リョットケ"という、誰にも意味の分からない"日本語"になってしまったのである。 後の文字を省略して簡易に発音 彼のどうしても日本語で"仏さま"と歌わせたいと切望する意を汲み、かつその単語に付けられた4つの母 <mark>したように、神道でもゴジンを</mark> | 音(り・お・っと・け)のイントネーションにも合致する単語は"御仏(みほとけ)"である。イントネーションも 音符にピッタリであり"リョットケ"という、仏を呼び捨てにするような、日本の慣習としては有り得ない妙 略して呼んでいたことは容易に な日本語の替わりに、私たち日本人が正しい日本語で"みほとけ"と修正してあげ、心を込めて歌ってもらえ

今後

想像がつく。

【蝶々夫人】に必要なすべての鐘の音等をコンピューターに録り込むことにほぼ成功した今、詳細な意義と使用方法を 少なくても10か国ぐらいには訳し、全世界の歌劇場に寄贈、一刻も早く真の【蝶々夫人】を理解してもらい、世界中で 真の日本が正しく表現されるよう、私は切望している。そのために必要な経費を賄うために、広く皆様のご理解と協賛 社(者)を募集している。

ば、プッチーニも仏様も"そう、そのとおり"と大喜びするであろう。